

2021 年度滋賀会第 1 回定例研修報告

滋賀森林インストラクター会

- 実施日 2021 年 4 月 10 日（土）
- 場所 リトル比良・音羽～岳山往復
- 行程 音羽バス停 9:10→登山口 9:15→賽の河原 10:20→常夜灯 10:50→白坂 10:55→
弁慶の切石 11:30→岳山 12:40～13:10→音羽バス停 15:30→近江高島駅 15:45
- 参加者 （本日）梶谷、小西、高橋、森上、佐々木
（下見）小西、関澤、橋木、佐々木
- 研修コースの概要 このコースは比良山系登山コースの一部で、主峰の武奈ヶ岳など標高 1,000m 級の稜線を結ぶコースに比べ、精々 500～700m の峰をつなぐコースであるため、リトル比良の愛称で呼ばれている。本研修では、登山口である音羽バス停から岳山（565m）を折り返すコースで距離は 5.2km、標高差 490m、所要時間 6 時間 15 分。



■研修内容



登山口・音羽バス停をスタート



出発直後、民家の植え込みに物騒なお出迎えが…
ツタウルシ[ウルシ科ウルシ属]
最強のウルシ、ツル性・3 出複葉



山道に入ると、コバノミツバツツジの歓迎を受ける、今が見ごろ [ツツジ科ツツジ属]



コバノミツバツツジは雄しべが 10 本
ミツバツツジは 5 本



数は少なかったが、咲き方は見事なオオイワカガミ。
[イワウメ科イワカガミ属]

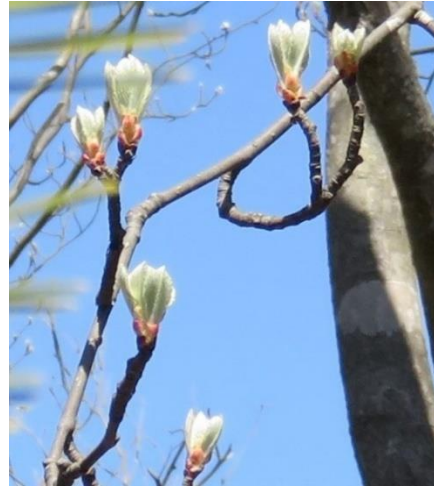
花の先端がフリル状になっているのがゴージャスな感じ。葉の表面が、太陽の光を鏡のように反射しているのが和名の由来。



登山道脇にこのような道標が。
右 嶽詣道とあるのは、山の中腹にあった嶽観音堂への道標。



登り始めの植生はこんな感じ。
地表をコシダとウラジロが覆っているのは、花崗岩質で貧栄養の土壤である証し。
遷移はそれほど進んでいないので、以前は禿山に近い状態であったことがうかがえる。
ここも地元住民の薪炭材料、山菜、生活用具材の供給地であったに違いない。



登り進めると、一見コブシかタムシバの花を連想させる白い物体が点々と。一同思案しながらも正体わからず。オオカメノキかアオハダの新芽か？後ほど、小西塾長の調査でウラジロノキ[バラ科]であることが判明。太陽光線が強くて、新芽の産毛が普段以上に白く光って見えた。



短枝がトゲのように見える
オオウラジロノキ[バラ科リンゴ属]
果実は表面がナシ状のざらつきがある
が、赤く色づきリンゴの味がする。



ケカマツカ[バラ科カマツカ属]のツボミ。
その名の通り葉の産毛が白く光って見える。



高度を上げていくとガレ場があり、常夜灯が立っている。

この常夜灯を立てたのは、伊勢国白子の長嶋長十郎という人で、母親の大病平癒祈願のため1685（貞享2）年9月18日から7日間、観音堂に参籠、祈願の甲斐あって全快した。そのため田畑を寄進し、常夜燈を建立した、と伝わっている。

ここで一枚。



白坂

ガレ場から5分も登らないうちにこの風景。花崗岩の風化した、砂の急斜面が広がる。真っ青な空と砂の白さが目に眩しいが、よく見ると人の歩いた跡。近づいてみたい気持ちになるが、容易に行けそうにないので写真だけ撮り、先を急ぐ。



観音堂跡に近づくと、アカガシ[ブナ科コナラ属]の巨木が目につく。登山道脇だけでも二本。周辺は県下有数のアカガシ林と言われている。暖温帯を代表する樹木の一つ。



岳山山頂
標高 565m
石室に安置してある石造観音三尊。



冷温帯の代表樹種ミズナラ
[ブナ科コナラ属]



登りには見つからなかった白坂への進入路が、下りで偶然見付き、早速よじ登り記念に一枚。青い空、白い砂。眼下の琵琶湖がエーゲ海に見えるから不思議！

写真で紹介できませんでしたが、他に観察した植物は、ニワウルシ、ヤマザクラ、アカシデ、マルバアオダモ、ツクバネガシ、ウラジロガシ、ベニドウダン、キンコウカ（所在確認のみ）。

(第1回担当：佐々木)